火の花
1967年10月14日号外
NO4
革命的共産主義者同盟関西地方委員会発行。

斗いは新しい局面に入った！

〈一〉

同志諸君！10／8日から13日にかけての、帝国主義とその政治委員会佐藤の「ベトナム侵略阻止」、「訪ベト阻止」の「羽田闘争」の局面は、今大きく転換しはじめている。10／8から10／21の国際反戦闘争の局面は、10／13から11／12にむけての佐藤訪米闘争へと発展しつつある。日本帝国主義と東南アジア諸国との、特に、ベトナム戦争と直接的にとらえられた「訪ベト闘争」は、13日の闘争とともに大きく変わりつつある。

政府は、明らかに、東南アジア政策を、沖縄、小笠原、を中心にすえた「70年安保条約問題」、日本の「自主防衛」問題にその政治的中心をもどした。

「羽田実力闘争」と、官権の暴虐と弾圧に対する抗議と、追悼は、十三日でおわったのであり、情勢は再び、「ナショナリズムと自主防衛」を中心とした基調をとりもどしている。

情勢は、はっきりと、「訪ベト」から「訪米」に移行している。「訪米」は

① 「70年安保条約」と中国、ベトナム、東南アジアの政治、経済不安、―日本の自主防衛

②、沖縄、小笠原、北方領土問題、

③、ベトナム戦争と、日本、米国、中国をはじめとする諸国の対応、

といった諸問題を含んでおり、「ベトナム反戦」は、これらの一部分にくみこまれつつある。

我々は、羽田闘争―ベトナム反戦、実力闘争、日本と後進国の諸関係と、これに対する政治的主張、をより高度な関係の中で位置づけなおす必要がある。

今、我々にとって一番重要なことは、すべての論争の中心を、11／12「訪米阻止闘争」に集中しなければならないということである。すなわち、安保条約即時破棄を我々の政治主張とすべき時が来た。

〈二〉

我々は、70年安保を中心として、全面的政治ビクロを組織し、宣伝、扇動しなければならない。そして他方で、「訪米阻止」実力闘争の必要性を主張しなければならない。そして、11／12闘争に向けて闘争体制をかためなければならない。

70年安保について、我々は問題をこうたてるべきだ、① 安保は、日米帝国主義軍隊を中心とする問題である。両国の権力が、植民地、被抑圧民族を共同で弾圧し、搾取するための協定であるだけではなく、日本の労働者階級、人民に対する弾圧と搾取の協定であること。

②、安保は、両国ブルジョアジーの協定、その競争と対立と、労働者階級、人民、そして、植民地、被抑圧民族の搾取のための協定である。

③、日米労働者、人民、植民地、被抑圧民族、中共に対する、日米帝国主義と、民族ブルジョアジー、カイライ政権、軍事政権の階級的同盟であり、直接的には、労働者、ベトナム戦争に対する軍事対策である。

だから、ベトナム戦争を終結させようと思うならばこうした資本とその権力のつながりを、いたるところでたち切るよりほかにないこと、又、沖縄、小笠原を中心とする問題も、以上の関係をぬきにした「祖国復帰」「無条件完全返還」などというのは、無意味である。

日本共産党、社会党は、11／12にむけて、沖縄、小笠原問題を中心とした、佐藤訪米にたいする要求闘争として、巾広い運動を展開し、一方で、全面的政治ビクロを拒否し、他方、実力闘争に対して、暴力批判で対応しようとしている。

まさに、10／13から、11／12にかけての中心的な問題は、対外的には、70年安保条約に象徴される日米・東南アジア諸国のブルジョアジーの利害対立を内包しながらの階級的同盟 対内的には、自主防衛とナショナリズム―その一つの具体としての沖縄、小笠原を中心とする、民族主義、国家主義、そして帝国主義

と、日和見主義の結合としての社会排外主義の昂揚に焦点が移っている。そしてこれをめぐる、社会党、特に、日本共産主義党の追従であり、一定の量的な大衆闘争の昂揚が、この枠は一方で社会排外主義への挑発として、他方では、そこまでゆかないとしても日和見主義への追従いと我々がどの枠に闘えばよいのかという点に凝縮されているのである。

自衛隊、警察の強化、沖三次防、中共と反共防衛、ベトナム戦争と反共、沖縄、小笠原とナショナリズム、自由化と産業政策、合理化と、イデオロギー、政治統制、こうしたものは、国内的、国際的に進んでいる資本の集中と集積、その有機的構成の高度化をとおしての、国際的な、市場再分割と、国内に於ける階級、階層の利害の対立、資本家の搾取と、労働者に対する分断支配が、すべての諸悪の本質である。

①日本共産党と社会党は、ブルジョアジーと権力の帝国主義の本質をあらわにした攻撃の前に屈服し、これに挑戦し、ブルジョアジーと権力に対する全面的政治ゼクロを放棄しているのであり、彼等の沖縄問題をめぐる態度は、はっきりと社会排外主義的傾向を示し「祖国復帰」というナショナルな利害によってブルジョアジー性におちいっているのである。

②、すでに、「火花」号外No3、の中で明らかにしたごとく、「一方で、労働者を中心とした大衆の昂揚と、他方日本共産党、社会党をはじめとする政党の後退、動揺、裏切りが同時に進んでいるということである」、日本共産党は、一方でこの大衆の昂揚に依拠して、沖縄問題を中心として、大衆闘争のスケジュールと動員を組んでいる。(これは、一方で、佐藤一訪米の意味を、全面的にゼクロするのではなく、ブルジョアジーの矮小な枠の中で訪米の意味を考えている点、他方においては、政府、沖縄そのものに対する態度において問題、誤りをおかしていることである。) そして、他方においては、10/8羽田闘争に対して広い運動と、実力闘争、暴力反対、などの主張としている。この二つのことは、斗いの戦術における日和見主義と、政治主義におけるブルジョア性とは、まったくうらはら関係に立たされているのである。

〈三〉

問題は、今、10/8闘争が、三つの問題に分断されこの両方が共倒されようとしてあり、こうしたかたちで、羽田闘争を闘った部隊と、その主張は、今、日本共産党と社会党に代表される、一方での国家とブルジョアジーの攻撃、主張と、他方に於ける大衆の日和見性、自然発生性への挑発に直面しているのである。

今、我々にとって必要なことは、この三つの領域に対し、大胆に、忍耐不抜の斗いを組織しなければならない。

我々の任務は、三つである。一つは、党としての、宣伝、扇動、全面的政治的暴露である。二つは、実力闘争、戦術をはっきりと、我々がけんじすることである。

11/12「訪米阻止」闘争を提起せよ!、そしてこの訪米の意味を、日本帝国主義者が口先だけでいっている枠の中で問題を立ててはならないのである、この任務を制限し、ブルジョア性に転落してはならないのである。

訪米阻止闘争を、大衆の自然発生性に挑戦して斗うことは出来ない。訪米闘争は、意識的に、準備され、組織されたものでなければならないのである。

各級機関は、組織的体制をつくりあげよ!

〈四〉

すでに、権力の動きははっきりとした。権力は動揺し、大々的弾圧は、佐藤帰国までである。

自民党、国会、警察、公安、法務局のあいだに、対立と矛盾、判断のちがいがある。大々的弾圧の可能性は臨時国会がつる。

ブルジョア新聞のキャンペーン、日本共産党の裏切りに助けられ、権力は現在、政党と大衆の日和見主義にいきよして、大衆の分断作戦にちみちをあけ、政治的主張を、ブルジョア路線の枠の中にとじこめ、他方実践的闘争に於いてトツキした斗いに集中砲撃をあびせている。我々は、この斗いを斗いぬかねばならない。

同志諸君、一二日の権力の姿さぶりはおわった、今は反撃の時である。諸君、この反撃は、意識的な組織的な斗いである。

以上